

| | |
|---------------|---|
| Title | 米國中西部方言の音聲構造に就て(Ⅱ) |
| Author(s) | 林, 榮一 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 2 p.45-p.77 |
| Issue Date | 1953-07-20 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80099 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

米國中西部方言の音聲構造に就て(II)

林 榮 一

A Phonemic Analysis of American English in the Middle West (II)

Eiichi HAYASHI

S U M M A R Y

For completion of the statement left unfinished in the preceding volume, the present paper deals, in the first place, with the syllable structure of Midwest American English and then with the prosodic phonemes thereof. If properly approached, the writer believes, the sanctum sanctorum of language is not altogether out of our reach and what he drives at is, as to the first, the establishment of a basic pattern to cut the Gordian knot of syllabication seemingly so mysterious and long forsaken by many scholars. The conclusion is only too simple. The pattern is /CVC/ and nothing else. As to the second, he limits the field of study in this essay to the sequence of syllables, where, after all is said and done, the relevant prosodic feature as supra-segmental phoneme is only the three kinds of *taseme* (stress phoneme): Strong /'/, Medial /`/, and Weak / /.

承前のことば 前號に於ては、紙面の關係上取り敢えず母音と子音のみに就て卑見を述べて第1部としたのであるが、その結果敘述が半端になつていたので、本號に於ては、續いてその上部構造である“syllable”と、“syllableを單位とする sequence の「場」”に於ける諸現象を觀察して第2部とする次第である。勿論問題が大きなものであるから、本篇で記述が終るわけではなくて、更に擴大された sequence 即ち utterance 全体にわたる構造体系を設定する仕事が残つていたのであり、それを含めて始めて一應の完結をみることになる。これは第3部で取扱う筈であるが、第1部と第2部とは layer と dimension とに於て差こそあれ同一 plane に屬する問題であるに對し、この最後の部分は稍趣きを異にする内容であると考えられるので、その發表は別の機會に譲り、こゝでは一応切り離して處理したい。尙本稿の内容の一部は昭和27年度の日本英文學會中央大會及び九州地方大會で發表したものと重複することをお斷りしておく。(本稿の音素學的表記は、引用の材料もすべて第1部で示した私の system に統一したことも諒承されたい。)

それから、この機会を利用して、第1部発表以来各方面から寄せられた種々の激励と批判に對して感謝の意を表すると共に、若干私の立場を明かにしておきたいと思う。それはこうした新しい行き方に對して發せられる疑惑に關してである。懷疑の聲は外部的にも内部的にも聞かれるのであるが、感情的な嫌忌の論は冷嚴な學問の世界にあつてはそれ自体無益である。要は眞理の探究に *raison d'être* をもつと考えられるものに就ては眞剣な實踐を通じて謙虛にその價值を含味することであろう。次に、餘りにそのやり方が外面的、形式的、そして機械的であるという批難がある。即ち主体性の没却と意味の世界との隔絶の指摘である。又表現の豊富な高い文化性を有する言語をも一律に扱うことにも不滿がある。殊に *évépreia* として言語を觀る立場からはその本質を逸するという懸念があるかもしれない。生きた言語が要素の分析によつて形式的に固定されることの *possibility* の問題でもある。つまり〈phoneme〉そのものの根本的批判である。更に實用的な見地からは觀念の遊戲に見える點もあるかと思う。これら一連の批判に對しては、勿論最初から對決するつもりであるし、又その應答の要點は第1部の前半に於て既に伏線的に用意されているわけであるから、乏しい紙面に於て今こゝで逐一論議することは必須ではない。たゞ私の言いたいのは、こうしたやり方だけが、私自身唯一無二のものであると思つていてのではないということなのである。残念ながら私は米國の一部の *structuralists* の如く絶對的な自信は持てないし、又 *Copenhagen* 學派の如く *linguistics* それ自体を目的とする立場にも徹し切れないのである。私は現在の段階にあつては、飽く迄この行き方の有用性を信じ、非力ながらも實踐を續けるものであるが、その眞意はこれを *aufheben* して、更に高次の段階に於て *logos* の神祕に挑戦することにある。要するに一つの礎石としている立場である。前號に於て、私は「ことは人間自体の問題である」と言つたが、これが私の言語研究に對する解釋を端的に表現したものであることを特に申し上げておきたい。

7 Syllable 前號に於ては *syllable* にメスを入れる直前で筆を折つたので、本稿では改めて **7** から始めることにする。何故「音節」なるものに斯様な重點を置くかといへば、*syllable* は *layer* からすれば *phoneme* の上部構造であるが、具体的には *phoneme* の *carrier* であり、*phoneme* は *syllable* に於ける *permitted sequence* に於てのみ存在し得るという事實があるからである。従つて第1部に於て行なつた *segmental phenome* の分析は、實は *syllable* の *structure* の解釋と相互に規制し合つていのである。これが第2部の展開を不可欠にしている理由である。以下音節の本質を順次を探つてみたいと思う。

(A) 節化作用 疑いもなく話音の具体的單位は *syllable* である。之に關係なく吾人の *speech sound* は存在し得ない。*phoneme* は *Pancocelli-Calzia* の言う如く全くの虚構ではないにし

ても、實際問題としては、意識的分析により抽象されたものであつて、言語の擔い手にとつては直接の把握の對象ではない。發音の矯正を行う時の吾人の經驗によつてもこのことは理解される。即ち吾人の言語活動の始原的作用は、音聲面からすれば、分節の單位の形式である syllable の形成、つまり articulating であることである。phoneme の數に一定の限度があるということも、この節化作用に基く langue の相關的全体の structure に規定されるからである。syllable とはその etymon の示すが如く、L. syllaba < Gr. συλλαβή 即ち “take together” (纏める) であつて、統化作用にその本質がある。これあるが爲 amnesia や聾啞の人々の言語行爲が可能となることも屢々例に引かれている通りである。斯くの如く syllable は人間が人間である所以の一つであるとされる言語を成立させる根源的基盤であつて、これを以て言語現象を割り切ろうとする觀點も生ずる (例えば Haugen: Phoneme or Prosodeme, Lang., 25. 3, pp.278—282)。こゝで問題となるのは、かゝる自然發生的であり本源的である人間の能力が具体的に個々の langue に於て如何なる相で現はれるかということで、例えば前にも述べたが英語の skate は 1 音節であるのに、異なる言語の使用者には 2, 3, 4 音節に聞かれる事實がある (Pike: Phonemics, p. 65)。獨人が vier を [fi:ər] と言つても當人には 1 音節である (有坂: 音韻論, p. 105)。このことは決して主觀的な問題ではない。要點は syllable を形成するという普遍的な作用が夫々の langue の構造によつて個有な特徴を以て具現しているということであり、且つその言語の native speaker にとつては、それが本能的直觀的に把握されているということなのである。この問題を明らかにするのが本稿の目的の一つであるが、その前に、syllable なるものが成立し得る根據を先づ「共通の廣場」から眺めてみよう。

(B) 成節原理 syllable なるものが如何にして成立するかということに就ては随分色々な學説があるが、比較的一般に知られているものは、「きこえ」(sonority) 説であろう。「きこえ」とは一体何であるかということに就ても議論がないではないが、一應物理的亮度を問題にし、degree をつけて表示することが行はれているのは周知の如くである。Jespersen は、その相對的頂點を主として問題にして、“in jeder Lautgruppe gibt es ebensoviele Silben als es deutliche relative Höhepunkte in der Schallfülle gibt.” (Lehrbuch, p. 193) と言つている。Bloomfield の如く “syllabic stress” (e. g. string: stirring) を指摘する人もあり (Language, p. 122 ff.), Jones の如く更に special intonation をも含めて “prominence” を唱えることもある。即ち “Each sound which constitutes a peak of prominence is said to be syllabic, and the word or phrase is said to contain as many syllables as there are peaks of prominence.” (Outline, §211) と言う。以上は聽覺印象的に解釋する所謂 Schall-

silben の問題であつて、Trautmann, Viëtor, Brücke 等も大体こうした立場によつてゐるわけであるが、これに對して知覺の中心點を發聲の面から説く立場がある。これは結局 Drucksilben を取り扱うことで、要は話音の連續に於て呼氣の強弱が繼起するわけであるが、強の部分で音節が成立し、弱で谷間が出来るということである。Merkel, Storm, Sievers 等はこの見解に立つ。Roudet の示した實驗結果を佐久間鼎氏が紹介されているが（日本音聲學，pp. 250—253），それによれば呼氣の平均流出量は氣管内の壓力，聲門の開き方，調音努力等の大小に正比例するのであり、之等により呼氣流出量に急激な變化がある時には音節が更新されるということである。大西雅雄氏（音聲學論考，p. 112 ff.）は①壓＋非壓＞（C＋V）②非壓＋壓＜（V＋C）③壓＋非壓＋壓＞＜（C＋V＋C）④非壓－（V）の型が音節形成の原理である（何故かならば音の單一感が得られるから）と言つてゐる。これに關係して、米國に於て必ず引用される Stetson の説を quote するならば、“The syllable is one in the sense that it consists essentially of a single chest pulse, usually made audible by a vowel, which may be started or stopped by a chest movement.”（Motor Phonetics, p. 36）ということになるが、多くの人（例えば Kenyon, Trager, Bloch, Pike 等）は chest pulse と sonority は盾の兩面であるとしている。Sievers や Passy も同様である。Pike は要領よく音節とは “a unit of sound comprising one or more segments during which there is a single pulse and a single peak of sonority.”（Phonemics, p. 246）であると述べてゐる。更に de Saussure が咽頭以上の通路の aperture の形式に従つて，fermeture を “implosion” ouverture を “explosion” として＜＞に “point vocalique” の存在を指し音節の形成を認めたこと（Cours, pp. 79—88）は重要な説明である。これを expound した Grammont は，“la syllabe phonologique”（音聲學的音節）に就て “Une syllabe est donc une suite d’ouvertures croissantes suivie d’une suite d’ouvertures décroissantes”（Traité, p. 99）の如き説明を與えている。即ち音節＝la partie montante＋la partie descendante ということになるわけである。其他 de Groot の如く韻律的現象であるとか，Hjelmslev の如く structural unit であるとかいう説明もある。この Copenhagen 派の總帥は Uldall と共に Glossematics を創始してゐるのであるが，form に content を與える ontological substance に關し plerematics を考え，それに對して form に expression を與える physical substance に關し cenematics なるものを立て，後者の plane に於て syllable とは operational concept であつて “The syllable is not necessarily of phonic nature”（つまり實際の發音とは別であるということである）と言ひ，又 “A syllable is a chain of expression including one and only one accent.” という風に處理してゐる。この場合の

accent とは stress 又は pitch の degree 或は movement 乃至如何なるものであれ、これが變化することによつて meaning が變化することにより、即ち彼の所謂 commutation test により、存在が證明されるものを指す。具体例を示せば doctor/dák+ɫr/ は accent No. 1 及び No. 2 による二つの chains であり、従つて二つの syllables が成立するわけである（この場合 central part=vowel, marginal part=consonant で stress の accent は intense exponent であると説く）。彼の立場は要するに言語の system に於ける functional existence の hierarchy を問題にしているのであつて、その考え方は従來の概念を特殊化しているから理解し難い點があるが、参考になる點も大いにある（The Syllable as a Structural Unit, Proceedings of the Third International Congress of Phenetic Sciences, pp. 266—272, 及び Prolegomena to a Theory of Language [translation by F. J. Whitfield] 参照）。要するに一般的に言えることは、“sonant”や“vocoid”が中心になるにせよならないにせよ、以上に述べたような色々な原因で或る音が核心となつて一つの單位が出来るのであつて、これが音節であるとするのである。この場合の核音が“vowel”であり、それ以外が“consonant”であることは第1部, p. 107 及 pp. 112—113で述べた通りである。

(C) 分節理論 前節に述べた所によつて、音節なるものが如何にして成立するかは一應諒解されるわけであるが、その「切れ目」に就ては判然とした説明を與えている學者は少いようである。native speaker でも、例えば expression の /ikspr-/ の /s/ が前につくか後につくかは判断に苦しむ（Wallace: A Quantitative Analysis of C-Clusters in P. E., p. 21）。事實、Jones では /iks • pr-/ であり、Kenyon-Knott では /ik • spr-/ となつている。ACD でも後者である。（私の立場は勿論 A. E. の材料による。）Jones は “In many cases the bottom of the ‘valley’ must be considered as flat, that is to say there is no one point which can be regarded as the point of syllable division” と述べ、もし是非分ける必要があれば、derivation 等によつて conventionally にやればよいと言う（Outline, §212）。この事は殊に ambisyllabic な單音の場合は然りである。例えば copy /kápi/ の場合 /p/ は實は兩方の音節に跨がつているわけである。然し2音節である以上はこれを分ける tertium quid が必要な場合がある。Jones の言は音聲以外の要素を分節に持ち込んでいるわけであるが、言語自体がそうした複雑性を有しているのであるから、實際的には尤もなことである。然しそんな便宜的なものでなく、もつと合理的に一貫した原理はないものであろうか？ Trager や Bloch（Editorial Note to Eliason’s “On Syllable Division in Phonemics, Lang., 13. 2, p. 146）は actual division はないと言い、Vendryes（Language, p. 55）は「この仕事は谷間の底が

何處かと探る如き puerile な努力」とする。Brøndal は time-less system である phonology が音節という phonic elements の time-totality を取扱うことは許されぬと言う (Proceedings [1936], p. 44). 又 Eliason & Davis の如く individual speech habit とする人もある。Scripture は、そもそも音節なるものは物理的には恐らく定義されることのあり得ない、本来心理的な概念で、音聲の流動に於ける異同の感じに基くものであるとし (Anwendung der graphischen Methode auf Sprache u. Gesang, pp. 43—44), Calzia は “eine von Psychologen und Linguisten aufgestellte Fiktion” であると述べている (Exper. Phon., p. 119). こうなると取付く島もないことになるが、他方かなり積極的に syllable division の原理を示している人もないではない。Malone は hilly の /l/ は clear であるから initial になり又 “Before heterosyllabic single consonants other than /r/, the short vowels and glides make or end a syllable freely.” と述べ、image /i • mij/, safron /sæ • fran/ の如き例を挙げている (The Phonemes of Current E., Studies for William A. Read, p. 144). 然しこれは解し兼ねる節がある。第一に heterosyllabic ということが如何に證明出来るか、不明であり、第二に initial の特徴を捉えることの他に ambisyllabic な事実を処理する法が示されていない。ここで、de Saussure と Grammont の説を聞いてみると、前者は “Si dans une chaîne de sons on passe d’une implosion à une explosion (> | <), on obtient un effet particulier qui est l’indice de la frontière de syllabe…” と述べてこの間隙が音節の「切れ目」であるとしている (Cours, pp. 86—87). 然しながら、この間隙がかなり恣意的であることを認めている (Ibid, p. 89). そこで Grammont は “la syllabe phonétique” (音韻學的音節) を認め syllabe phonologique が必ずしも實現されない事實に觸れて、この場合の音種乃至生理的必然を更に左右する原動力を “tension” ということ で説明せんと試みた (Traité, p. 100). 例えば skate に於ては “point vocalique” は /s/ と /k/ に當然現はれるべくして實は然らざる所以はこの二音は一つの緊張で發音されて croissant となるというわけである。この tension とは何であるかはよくわからないが、 “l’effort musculaire buccal et laryngien” であり又有坂氏の指摘せる如く (音韻論, p. 103), Jespersen の所謂 “Akzent (Druck)” 即ち “Energie, intensive Muskeltätigkeit, die nicht an ein einzelnes Organ gebunden ist, sondern gesamten Artikulation ihr Gepräge gibt” (Lehrbuch, p. 119) と同様なものでもあろう。實驗的には Hill が音節の切れ目に tensivity の弱まりがあることを報告している (A Note on the Division of Syllables in P. E., American Speech, 8. 3, p. 60) のも同じ意味であらう。尚 Stetson は speed が音節形式の型に轉移を及ぼすこと (例えば OP>PO) を説い

て居り (Motor Phonetics, p. 34), Pike も “A syllable is a single unit of movement of the lung initiator … which includes but one crest of speed.” と説いて “Every occurrence of an initiator time bulge followed by renewed speed of the initiator movement is a trough or border between two syllables” と述べている (Phonetics, p. 116). 以上を要するに、元來音節というものが言語的虚構であつて實體なしという立場や音聲學的には分節することが困難であり無益であるという立場もあるが、><の間や更にtensionによる croissant と décroissant の間に切れ目があるとする立場或は speed の變化や呼氣壓の變化の個所に切れ目があるという立場もあることになる。前者は音節の實在を solid なものと觀じないのであるからこれは「もの」的言語の立場でない故一應切り離し、後者の立場によつて分節が少くとも phonemically には可能であると考えたい。斯くして現象面からの條件はほぼ解明されたことになるのであるが、何が故に然るのであるかという點になると問題は依然として未解決のまゝ残つてゐる。泉井氏は分節の境界は各言語に於ける恣意的行爲であると言つてゐるが (言語學 [現代哲學辭典], p. 114), この事は Sapir も syllabifying は言語によつて異ると言い (Language, p. 56), Passy も Français, Anglais, Allemand の對比に於て例證してゐる (Petite Phonétique Comparée, §§123—26) わけである。問題は従つてこの「恣意性」の根據である。勿論 “why” は吾人の認識の埒外であり、linguistics としては結局 “how come?” であるが、私はこの問題は phonetics では解けない事柄であつて phonemics によつて解答が與えられると思うのである。即ち structure sui generis の問題ではないかということである。もつと具体的に言えば私は structural pattern の設定によつて機械的に割り出すことの可能性を感じるのである。

(D) 音節構造型 既に述べたように、音節の擔い手は de Saussure の所謂「母音點」(<>) に具現する phoneme で、これを vowel とする。Trubetzkoy が “Il n’y a aucune langue dans laquelle les voyelles ne fonctionneraient pas comme centre de syllabe” (Principe de Phonologie, p. 197) と言つてゐるのもこの意味に於てである。そしてこの centre de syllabe を決定するのは totality に於ける pattern congruityであることは、[u] と /w/ や [i] と /y/ 等の關係で第1部 (p. 115) で示した通りである。Pike が syllable とは structural pressure による pattern であり、これは phonetics に於ける chest pulse に相當する (Phonetics, p. 65) と述べてゐるのは極めて示唆的である。私は素材としてゐるこの代表的な米國英語の母音を7つに限定したのであつた。其等の本質的音價は lax である (これは亮度の頂點をなす音は弛緩形であるとの説にも符合する) が、glide の或るものと結合することにより一般に

tense といはれる音質を展開し得ることもある。そこで次に私が作成した syllable の structural pattern を表示することにする。第1部, p. 107に掲げた segmental phoneme の chart を参照されたい。

(I) Simple Pattern

a) Vowel

| | |
|---|------|
| i | bit |
| e | bet |
| æ | bat |
| ʌ | but |
| ɑ | bot |
| o | boss |
| u | bull |
| 計 | 7 |

N.B. 之等は所謂 lax vowel である。

b) Consonant

| | (i) Initial | (ii) Final | | (i) Initial | (ii) Final |
|---|----------------|---------------|----------------|----------------|---------------|
| p | pin | cap | ※ ₃ | leisure | vision |
| b | bed | sob | c | chin | rich |
| t | tin | hat | j | job | hedge |
| d | dog | god | m | map | some |
| k | king | lack | n | net | pen |
| g | get | log | ŋ | | ring |
| f | fat | tough | l | lip | kill |
| v | van | love | r | red | far |
| θ | thin | both | w | war | low |
| ð | that | with | y | yes | pay |
| s | sit | loss | h | hen | |
| z | zip | has | ə | | law |
| ʃ | ship | fish | 計 | Initial 23 | Final 24 |

N.B. ※/3/は medial position に於てのみ syllable の頭、尾韻となる。

(II) Complex Pattern

a) Vowel+Consonant

| V \ C | w | y | ə | r | l | m | n | 計 |
|-------|--------|--------|---------|-------|--------|---------|----------|----|
| i | | ◦ beat | | +beer | | | | 2 |
| e | | ◦ bait | | +bear | | | | 2 |
| ʌ | | | | +bur | ▲apple | ▲bottom | ▲certain | 4 |
| ɑ | ×bout | ×bite | △balm | +bar | | | | 4 |
| o | ◦ boat | ×boil | △bought | +bore | | | | 4 |
| u | ◦ boot | | | +boor | | | | 2 |
| 計 | 3 | 4 | 2 | 6 | 1 | 1 | 1 | 18 |

N.B. (1) ◦ は所謂 tense vowel, (2) × は所謂 diphthong, (3) △ は所謂 long vowel, (4) + は所謂 r-colored vowel, (5) ▲ は所謂 syllabic consonant.

b) Consonant Cluster

(i) Initial

| (α) Double Consonant | | | | | | | (β) Triple Consonant | | | | | 通 計 |
|----------------------|--------|--------|------|--------|--------|----|----------------------|-------|--------|------|---|--------|
| | I | II | III | IV | V | 計 | VI | | | | 計 | |
| | s+ | +r | +l | +w | +y | | I+II | I+III | I+IV | I+V | | |
| p | spin | pray | play | | pure | 4 | spring | split | | spew | 3 | 7 |
| b | | bray | blow | | beauty | 3 | | | | | | 3 |
| t | store | tray | | twin | ※ | 3 | strike | | | | 1 | 4 |
| d | | dray | | dwel | ※ | 2 | | | | | | 2 |
| k | skin | cry | club | quick | cute | 5 | screw | | square | skew | 3 | 8 |
| g | | gray | glad | guano | gules | 4 | | | | | | 4 |
| f | sphere | fray | flag | | few | 4 | | | | | | 4 |
| v | | | | | view | 1 | | | | | | 1 |
| θ | | thrill | | thwart | ※ | 2 | | | | | | 2 |
| ʃ | | shrill | | | | 1 | | | | | | 1 |
| m | smell | | | | mute | 2 | | | | smew | 1 | 3 |
| n | snow | | | | ※ | 1 | | | | | | 1 |
| h | | | | what | hume | 2 | | | | | | 2 |
| l | slow | | | | ※ | 1 | | | | | | 1 |
| w | swell | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 計 | 8 | 9 | 5 | 6 | 8 | 36 | 3 | 1 | 1 | 3 | 8 | 44 |

N.B. ※の欄に /ty-/ (tube), /dy-/ (dew), /θy-/ (enthuse), /ny-/ (new), /ly-/ (lure) 等が全くないわけでないが, この方言で規則的に /-yuw-/ [-ju:-] が現はれるのは大きく分ければ Labial と Velar の二種の後に限るので省くべきであろう. 尚 /sθ-/ (sthenic) は唯一の例外的結合であるので pattern として設定することは差控えたい.

(ii) Final

(α) Double Consonant

| | p | b | t | d | k | g | f | v | θ | ð |
|---|------|------|------------------|-----------------|------|-------|-------|--------|-------------|--------|
| p | | | crypt °sipped | | | | | | × depth | |
| b | | | | °robbed | | | | | | |
| t | | | | | | | | | | |
| d | | | | | | | | | × width | |
| k | | | act °looked | | | | | | | |
| g | | | | °begged | | | | | | |
| f | | | left °laughed | | | | | | × fifth | |
| v | | | | °lived | | | | | | |
| θ | | | °frothed | | | | | | | |
| ð | | | | | | | | | | |
| s | wasp | | must °passed | | ask | | | | | |
| z | | | | °buzzed | | | | | | |
| ʃ | | | °fished | | | | | | | |
| c | | | °patched | | | | | | | |
| j | | | | °judged | | | | | | |
| m | lamp | | °camped | °hemmed | | | nymph | | | |
| n | | | want | fond °fanned | | | | | month | |
| ŋ | | | | °longed | link | | | | × length | |
| l | help | bulb | belt | weld °killed | milk | | wolf | twelve | health | |
| r | harp | herb | start | hard °barred | work | berg | scarf | serve | worth | |
| y | keep | gibe | gate | lead °prayed | like | vague | life | leave | heath | bathe |
| w | hope | robe | boat | loud °rowed | coke | vogue | roof | rove | × truth | clothe |
| ə | | daub | bought | laud °jawed | talk | | | | | |
| 計 | 6 | 5 | 14 | 13 | 7 | 3 | 5 | 4 | 9 | 2 |

N.B. (1) 動詞並びに名詞の語尾及び縮約の /s, z, t, d/ は, phonemics に於ては一應 irrelevant とし, monomorphemic word と同じく取扱うが, 参考までに。印を附し, 同欄内に併記した. (2) ×印の -th /-θ/ は productive suffix としては取扱はない. (3) +印の

| s | z | ʃ | ʒ | c | j | m | n | l | 計 |
|----------------|------------------|---------|-------------|-------|-------|------|------|--------|-----|
| lapse °lips | | | | | | | | | 3 |
| | °cabs | | | | | | | | 2 |
| °cuts | | | | | | | | | 1 |
| | adz(e) °adds | | | | | | | | 2 |
| six °looks | | | | | | | | | 2 |
| | °begs | | | | | | | | 2 |
| °cuffs | | | | | | | | | 3 |
| | °lives | | | | | | | | 2 |
| °froths | | | | | | | | | 2 |
| | °baths | | | | | | | | 1 |
| | | | | | | | | | 3 |
| | | | | | | | | | 1 |
| | | | | | | | | | 1 |
| | | | | | | | | | 1 |
| | Thames °comes | | | | | | | | 5 |
| since | bronze °pens | | | lunch | hinge | | | | 7 |
| | °things | | | | | | | | 4 |
| else | °bills | welsh | | filch | bilge | elm | kiln | | 15 |
| horse | furze °bars | harsh | | march | barge | term | barn | girl | 17 |
| rice | noise °skies | leash | + beige | reach | wage | lame | fine | bale | 19 |
| loose | rose °rows | +douche | + rouge | pouch | huge | dome | down | school | 19 |
| sauce | cause °saws | | + mirage | | | calm | dawn | bawl | 10 |
| 11 | 13 | 4 | 3 | 5 | 5 | 5 | 5 | 4 | 123 |

ものは元來は佛語である。(4) glide 同志の結合は incompatible とする。flour は /flawr/ でなく /fláw•Ar/ である。(5) halve や salve はこの方言では通例 /æ/ となる故 double consonant としない。

(β) Triple Consonant

| | s | z | t | d | others | 計 |
|----|-------------------|---------|------------------|----------|------------|---|
| pt | °crypts | | | | | 1 |
| pθ | °depths | | | | | 1 |
| ps | | | °lapsed | | | 1 |
| dθ | °widths | | | | | 1 |
| ds | | | ※midst | | | 1 |
| dz | | | | °adzed | | 1 |
| kt | °acts | | | | | 1 |
| ks | | | text | | ※sixth | 2 |
| ft | °rafts | | | | | 1 |
| fθ | °fifths | | | | | 1 |
| sp | °wasps | | °clasped | | | 2 |
| st | °lists | | | | | 1 |
| sk | °desks | | °asked | | | 2 |
| mp | glimpse °camps | | tempt °pumped | | | 2 |
| mf | °nymphs | | °triumphed | | | 2 |
| nt | °wants | | | | | 1 |
| nd | | °ponds | | | thousandth | 2 |
| nθ | °months | | | | | 1 |
| ns | | | °danced | | | 1 |
| nz | | | | °bronzed | | 1 |
| nc | | | °bunched | | | 1 |
| nj | | | | °hinged | | 1 |
| ɲk | minx °links | | °linked | | ※length | 3 |
| ɲθ | °lengths | | | | | 1 |
| lp | °helps | | °helped | | | 2 |
| lb | | °bulbs | | °bulbed | | 2 |
| lt | waltz °belts | | | | | 1 |
| ld | | °builds | | | | 1 |
| lk | °milks | | mulct °milked | | | 2 |
| lf | °golfs | | °golfed | | twelfth | 3 |
| lv | | °delves | | °delved | | 2 |
| lθ | °healths | | | | | 1 |
| ls | | | °pulsed | | | 1 |
| lf | | | °welshed | | | 1 |
| lc | | | °belched | | | 1 |
| lj | | | | °bulged | | 1 |
| lm | | °films | | °filmed | | 2 |
| ln | | °kilns | | °kilned | | 2 |
| rp | corpse °warps | | °warped | | | 2 |
| rb | | °curbs | | °curbed | | 2 |
| rt | quart °starts | | | | | 1 |
| rd | | °cards | | | | 1 |
| rk | °works | | °worked | | | 2 |
| rg | | °bergs | | | | 1 |
| rf | °dwarfs | | °dwarfed | | | 2 |
| rv | | °serves | | °served | | 2 |
| rθ | °earths | | °earthed | | | 2 |
| rs | | | burst °forced | | | 1 |

| | s | z | t | d | others | 計 |
|----|----------------|----------|------------------|------------------|-----------------|-----|
| rz | | | | °furzed | | 1 |
| rc | | | °marched | | | 1 |
| rj | | | | °urged | | 1 |
| rm | | °terms | | °termed | ※warmth | 3 |
| rn | | °turns | °burnt | °turned | | 3 |
| rl | | °curls | | world °curled | | 2 |
| yp | °reaps | | °reaped | | | 2 |
| yb | | °gibes | | °gibed | | 2 |
| yt | °gates | | | | ※eighth | 2 |
| yd | | °beads | | | | 1 |
| yk | °likes | | °liked | | | 2 |
| yg | | °leagues | | °leagued | | 2 |
| yf | °fifes | | °fifed | | | 2 |
| yv | | °sieves | | °sieved | | 2 |
| yθ | °heaths | | | | | 1 |
| yð | | °wreaths | | °wreathed | | 2 |
| ys | | | yeast °ceased | | | 1 |
| yz | | | | °seized | | 1 |
| yʃ | | | °leashed | | | 1 |
| yc | | | °reached | | | 1 |
| yj | | | | °waged | | 1 |
| ym | | °lames | | °lamed | | 2 |
| yn | | °signs | | °signed | ninth change | 3 |
| yl | | °seals | | °sealed | | 2 |
| wp | °stoops | | °stooped | | | 2 |
| wb | | °robes | | °robed | | 2 |
| wt | °boats | | | | | 1 |
| wd | | °roads | | | | 1 |
| wk | coax °soaks | | °soaked | | | 2 |
| wg | | °vogues | | | | 1 |
| wf | °roofs | | °roofed | | | 2 |
| wv | | °groves | | °groved | | 2 |
| wθ | °growths | | | | | 1 |
| wð | | °loaths | | °loathed | | 2 |
| ws | | | post °noosed | | | 1 |
| wz | | | | °posed | | 1 |
| wʒ | | | | °rouged | | 1 |
| wc | | | °couched | | | 1 |
| wj | | | | °stooged | | 1 |
| wm | | °dooms | | °doomed | | 2 |
| wn | bounce | °swoons | | °swooned | | 3 |
| wl | | °fools | | °fooled | | 2 |
| əb | | °daubs | | °daubed | | 2 |
| ət | °naughts | | | | | 1 |
| əd | | °lauds | | | | 1 |
| ək | °talks | | °talked | | | 2 |
| əs | | | °sauced | | | 1 |
| əz | | | | °caused | | 1 |
| əʒ | | | | °massaged | | 1 |
| əm | | °calms | | °calmed | | 2 |
| ən | | °pawns | haunt | °pawnd | launch | 4 |
| əl | | °bawls | vault | °bawled | | 3 |
| 計 | 38 | 34 | 38 | 39 | 8 | 157 |

N.B. 無印は monomorphemic のもの。°印はそれ以外のもの。※印は前表 (α) に見えなかった新しい結合を示す。尚 eighth は /eytθ/ 及び /eyθ/, months は /mʌnθs/ 及び /mans/ (clothes は /klowčz/ 及び /klowz/), length は /lepθ/ 及び /lenkθ/ と二種の combination があるので, その何れをも pattern としては (α) (β) (γ) 何れかの表に示してある。(或る音が入ったり抜けたり又有聲無聲となるのは發音上の偶發的 actualization と考えられるかもしれないが, それが現存の phoneme で代表する音である限り phonemics の表記に於ては reflect される。has to は /hæz tʌ/ でなくやはり /hæs tʌ/ である。従つて has は /hæz, hʌz, hæz, hʌs, ʌz, ʌs, z, s/ 等の alternation を持つことになる。

(γ) Quadruple Consonant

| | s | z | t | d | θ | 計 |
|-----|--------------|---------|-----------|----------|--------|----|
| kst | °texts | | | | | 1 |
| ksθ | °sixths | | | | | 1 |
| mpt | °tempts | | | | | 1 |
| mps | | | °glimpsed | | | 1 |
| ndθ | °thousandths | | | | | 1 |
| pkz | | | °minxed | | | 1 |
| lts | | | °waltzed | | | 1 |
| lfθ | °twelfths | | | | | 1 |
| rts | | | °quartzed | | | 1 |
| rst | °bursts | | | | | 1 |
| rmp | | | | | warmth | 1 |
| rld | | °worlds | | | | 1 |
| yst | °yeasts | | | | | 1 |
| ynθ | °ninths | | | | | 1 |
| ynj | | | | °changed | | 1 |
| yls | | | whilst | | | 1 |
| wks | | | °coaxed | | | 1 |
| wns | | | °bounced | | | 1 |
| ənc | | | °launched | | | 1 |
| ənt | °haunts | | | | | 1 |
| əlt | °vaults | | | | | 1 |
| 計 | 10 | 1 | 3 | 1 | 1 | 21 |

N.B. °印は monomorphemic なることを示す。尚, warmth は /-rmθ/ としては (β) 表に示してある。

以上の表は脱落せるものが絶対にないとは保證し難いが, 典型的な phoneme の combination による pattern は網羅したつもりである。この場合 Bloomfield の所謂 pre-final, main final 及び post final は實際上重要な區別であるが(従つて °印をつけて示しておいたが), 原理的に

は phonemics 自体の問題ではないので (morphophonemics の対象にはなるが), 特に別個に取扱うことは避けた。そこで、次に之等の表から、如何なる結論が導き出されるかということであるが、それは先づ第一に、音節構造としては表示された型が typical なものであり、且 possibility の限界であるということである。裏から言えば、表示されている何れかのものより less な combination は何かそれを補うべき要素が存在するし、more な combination は成立しないということである。第二に、表示した例は殆んど 1 音節のものであるが其等は話音の中で free に單獨で具現し得る能力を持つている。之等は従つて單獨で utterance の中で rhythm の beat の単位になり得る。このことは即ち stress を innate に具有していることを實證する。この事實から本然の姿に於て現はれる syllable は stress (詳しくは後述8, (III) 参照) を持つものであるということが言える筈である。2音節以上のものは、その何れかの音節に stress を持つわけである。syllable の機能である既述の「まとめ」作用は斯様な本然の姿に於て實現する。第三に表から抽出されることは、その本然の syllable に於ては、母音は決して單獨に現はれず必ず子音 (glideも含む) を後に従えていることである。(即ち本然の音節の/V/は所謂<nucleus>となる。) この方言に於ては、real, idea theater の類も /ríyál/ </ríyl/ともなる), /àydíyá/, /θíyatar/ であり、spa は /spúə/ である。(a, the は /éy/, /ðíy/ であつて /Δ/, /ðΔ/ は stress のない enclitic な場合に限る。) 第四に、本然の syllable に於ては母音が最初に來る場合 (例えば arm) が非常に少いことである。この事を實證する爲に、材料を三省堂のコンサイス英和辞典 (新版) に取つて、double asterisk を附してある最も基本的な頻度の高い單語に就て上述の手續に従つて音節構造の型を検出してみたのであるが、その結果は次の如くである。(同一綴で品詞により發音の異なるものは夫々を 1 語とし、その逆は全部を 1 語とした。又強弱形のあるものは強をとり、二種以上の發音あるものは最初に記載されているものによつた。發音の資料は Gerhardt 式のコンサイスの表記の他に Kenyon-Knott の辞典, A. C. D. 及び Webster を主とし、他に Jones の辞典と對照したり Palmer の A. Variants 及び筆者自身の現地に於ける data を援用した。完璧な list ではないかもしれぬが、大体の傾向は察せられるであろう。

| | | | |
|------|-----------------------------------|-------|---------|
| 1音節語 | /VC/↔/CCCVCCC/ | 型數12 | 語數891 |
| 2音節語 | /CVC・V/↔/CV・CCCVCC/ | 型數63 | 語數561 |
| 3音節語 | /VC・V・VC/↔/VC・CVC・CCVCC/ | 型數52 | 語數109 |
| 4音節語 | /VC・CV・CV・CVCC/↔/CCVC・VC・CVC・CVC/ | 型數16 | 語數17 |
| 5音節語 | /CVC・V・CVC・CV・CV/ | 型數 1 | 語數 1 |
| 計 | | 型數144 | 語數1,554 |

この中で /' / (Strong Taseme) のある音節は次の如くである。

| | | | |
|----------|-----|---------|---------|
| /CVC/型 | 638 | } 1,339 | } 1,554 |
| /CVCC/型 | 421 | | |
| /CCVC/型 | 154 | | |
| /CCVCC/型 | 126 | | |
| /其他/型 | 215 | | |

即ち/V/の前後を/C/又は/C-cluster/で囲んでいる型は4種であり、總數に對し36.2%を占め壓倒的に多數である。4種の中では/CVC/型が47.6%で半數に近い。

この結果に對して解釋を下すならば、前に述べた第三及第四の結論を集約して syllable の基本型は/CVC/であるということになる。即ち實際に/CVC/が最大多數であるのみならず、C-cluster もその機能に於てCと同一であるという根據がある。例えば sick の /s/ は stick の /st/ と殆ど等時に發音されるという事實である（服部：Phoneme, Phone and Compound Phone, 言語研究, 16, p. 93）。服部氏は又 /s/ は phonememe であつて [s]=/s/ の場合は simple phoneme であり、/st/ の場合は compound phoneme であるとも説く（音韻論と正書法, pp. 176—177）のであるが、要するに simple であるか complex であるかは、syllable の構造的價値の單位としては同等であると思はれるので /C/ と同様の取扱いをして差支ない。私も同博士に従つて ligature を用いて cluster を表示することが便利であると思う（例 street /striyt/）。然らば arm とか ink とかいう場合はどうなるのであるかという問題が出て來るであろう。これは /CVC/ pattern の例外と觀るべきであろうか？ 然らざれば enclitic な a name と an aim とは同一の sequence の場であるから共に /ʌ・néym/ とならなければならないことになる。勿論 diachronique には newt<an ewt, apron<a napron の様な例もあるし、現在でも子供は林檎を a napple と考えている様な例も報告されているし、又そうでなくとも find it が /fáyn・dit/ となるような Navarro Tomás の所謂 “phonetic syllable” も存在するわけであるが、こゝでは phonemic syllable を問題にして、一應 static に觀察しているわけであるから、同一の syllabication を持つことは不都合である。従つて前者は /ʌ・néym/、後者は /ʌn・éym/ となるべきである。phonetically にはこの種の現象に關しては、Sweet の有名な強勢開始點説（Primer, § 156）、既述せる Stetson の tempo 説、Grammont の tension 説、Sievers の Druck 説及び大西氏の弱子音説（op. cit., p. 117）等々あるが、phonemically にはどうであろうか？ Pike は極めて practically に、屁理窟をこねず frank に word ということて片附けた方がよいではないかと皮肉を言つている（Phonemics, p. 91）が、この態度は Hocket 等によつて勿論反駁されている（Two Fundamental problems in Phonemics, Studies in Linguistics, 7.2, p. 31）。米國ではこんな場合普通に行はれている解決は “junction” なる pho-

neme を設定することによつてゐる。juncture とは Trnka 等が “suture” として示しているのと一寸似た所もあるが、Trnka の場合は、layer, prayer を /ler/ 及び /léy • Ár/, /prer/ 及び /préy • Ár/, 又 hire /háy/ と higher /háy • Ár/ としているが如きもので (A phonological Analysis of P-day Standard E., pp. 12—14), 全く一緒ではない。(私は最後の例は兩方とも /háy • Ár/ とすることは第1部に於て述べた。) Bloch 等に従えば、これは supra-segmental phoneme の一種で、utterance の中で主として pause の前後に於て、特徴のある allophone 其他の現象が生ずるが、その feature の源になる phoneme が open juncture である。その feature が現はれぬ場合は close juncture の phoneme が存在することになる。そして open juncture は pause の前後に現はれる場合 (即ち所謂「單語」である free-form を示す場合) と、際立つた pause がなくとも utterance の内部に同様な特徴を示して現はれる場合 (即ち所謂「複合語」である compound-form を示す場合) とがある。前者は external open juncture, 後者は internal open juncture である。その表記は前者は segmental phoneme 間に space を置き、後者は hyphen を以て示す。close juncture は表記しないことによつて示すわけである。例示すれば、This is nitrate /ðis iz náyt-rèyt/, This is night-rate /ðis iz náyt-rèyt/ である (Outline of Linguistic Analysis, p. 47). これに従えば a name /ʌ-néym/, an aim /ʌn-éym/ ということになつて解決がつくことになる。これは廣く利用せられていて、allophone の差を一つに統一せんとする phonemics の有力な一つの原理であり、syllabication を simplify する武器でもある (Harris: Methods in Structural Linguistics, pp. 82, 120). 然し私はこの juncture に就て三つの點の不審がある。一つは果して supra-segmental であるかということ、もしこれを phoneme とするならば、segmental と同一 level に置くべきではないかということである。その二は現象面で捉えるのには便利なやり方ではあるが、説明のつかぬ x が出る毎にこれを何等の phoneme に置き換える危険がありはしないかということである。この場合 pause のよつて来る根據は何處にあるかは示されていない。これでは Pike の如く morphemics を援用して free form 及び compound-form の要素は切り離せるというのと同じである (尤もこれは極端な言い方で、元來は morphemics を enter させぬ爲に音聲面から加えた操作であるのであるが、それにしてもである)。第三に open とか close とか external とか internal とか複雑な構成を持ち出すことは、形式論理を充足させはするが、本質的な解明には餘り役立たないのではないかということである。それでは、他に何か方法があるかと反問されるわけであるが、私は前に述べた syllable の structural pattern である /CVC/ を今一度よく考えてみたいと思うのである。この型が決して思いつきのものでなくて、solid な data の上に立つ基本形であるとするならば、これに準據して struc-

ture を解釋すべきである。こゝで、前に pattern 表からの結論の第一で述べた「less な combination は何かそれを補うべき要素が存在する」ことが當然考えられなければならない。即ち ink や arm の場合は母音に先行すべき /C/ がないのではなくて形を変えて存在しているのである。具体的に言えば、「無い」のではなく「無」があるのである。即ち positively に「零」が存在するのである。これを便宜上わかり易く /O/ で以て表記することにする。そして、この pheneme は consonant の segmental phoneme の一種であると考えたい。それでは non-overlapping の原則に背馳するのではないかとの疑問も生ずるが、弱勢の /Δ/ が、各母音の変形として具現することのある現象に関係なく、一つの獨立した母音として定立されて、alternation となる如く、/O/ が各子音と獨立に存在して、alternation が存在すると解釋して差支ない。従つて a name /Δ・néym/, an aim /Δn・Oéym/ である。(night-rate は /náyt・rèyt/, nitrate は /náyt・trèyt/ にすぎない。)このことは或る人々にとつては詭辯と考えられるもしれぬがこれによつて Bloch が示した如き open juncture の feature は /O/ の存在によつて生ずると、より根源的に、そしてより説明的に記述することが可能となる。この zero phoneme の定立は服部博士の諸論文に見えるもので、私としてもこれから hint を得たことを記して感謝の意を表するわけであるが、上述の process は全く私の責任であることは斷はらなくてはならない。又同博士は、これを總ての音節に適用して hitting は /hít・Oig/ として同時に ambisyllabic な問題をも解決されるのであるが、私は後で述べるように、稍異つた解釋をするものである。この zero なる概念は Pike も Bloch も Halpern も皆反對しているのであるが、私は極めて現實的で且つ有力なものであると信ずる。

次に主要な phonemicists の見解と卓見を比較して示してみることが興味がある。

| | Trager-Bloch | Twaddell | 服 部 四 郎 | 卓 見 |
|----------------------|--------------|----------|---------|--------|
| bit bet bat | /CVC/ | /CVC/ | /CVC/ | /CVC/ |
| bee buy boy | /CVC/ | /CV/ | /CVCO/ | /CVC/ |
| aim arm ink | /VCC/ | /VC/ | /OVCC/ | /OVCC/ |
| beat bite bait | /CVCC/ | /CVC/ | /CVCC/ | /CVCC/ |

(E) 分節原理 前項 (D) によつて /CVC/ が成節の pattern であることが明らかになつたと思はれるが、2 音節以上のものを分ける場合、例えば (C) で述べた copy や expression

の場合などは如何に syllabication を行うかということが残つた問題である。(これは實務に於ける必要性と関連を持つが、word division は spelling による制約があり、又發音のみでなく語源の意識が強く働くので若干事情が異なることは承知しなければならぬけれども〔Webster 巻頭解説参照〕、これから述べることは原理的に参考になるのではないかと思う。) 即ち trouble は medial combination にあるのである。(D) で述べた pattern によつて、initial と final の構造が明らかになつたが、この二つが combine して medial combination が成立する。utterance 全体に就てこれを見るとその可能性は實際上は尨大なものとなる。例えば worked through の如く /-rktθr-/ という場合もある。(既出の Wallace の論文ではこの問題が取扱はれ、一般口語に於て 5,362 の combination を擧げている。) 然し本稿では syllable を單位とする sequence の場(即ち word)に限定しているので、上例の如き場合は除外する。原理を列挙してみると、medial combination は final+initial で、それ以外ではない(原理1)。このことは自明のことであろうが、極めて重要なことで、分節する場合(D)に示された initial 及 final の型以外には分けられないのである。例示すれば、expression や English の場合、/-kspr-/ は ① /-k·spr-/ ② /-ks·pr-/ の可能性はあるが /ksp·r-/ や /-·kspr-/ ということとはあり得ないし、又 /-p(g)l-/ は決して /-p(g)l·-/ や /-·p(g)l-/ にはならないのであるから當然 /-p·(g)l-/ となるより他に解決出来ないものである。即ち機械的に convert /kan·v́art/, substance /sáb·stans/ 等の如くなる。次に、然らば expression の場合は二つの可能性がある(前述せる如く、Jones は /-k̂s·pr̂-/ とし、Kenyon は /-k̂·spr̂-/ としている)のであるが、どちらがこの方言に於て優勢であるかといへば後者であるのは如何なる理由であるか、ということになる。これは、medial combination に於ては final よりも initial の型が優先するという傾向による。(原理2) これは音節を始めるには節化作用の本質から、restricted sound である子音を以てなるべくはつきりした區切りをつけたいからであろう。従つて construction は /-ns·tr-/ の可能性を否定して /kan·strák·ʃan/ となる。同様に、hundred も /hán·dred/ となつて /-nd̂·r-/ を否定するのである。(stress のある音節は initial には出来るだけ多くの子音を取るが、final には原理1に矛盾しない限り最小限一つの子音をとれば充足される。) それでは copy の如き場合は如何になるのであろうか? de Saussure は >|< を示したが、“des éléments différentiels, saillants pour l'oreil et capable de servir à une délimitation des unités acoustique dans la chaîne parlée”(Cours, p. 83) としているのは Passy も例示しているように ami とか cadeau の如く佛語に適用出来ても英語には妥當しない。copy の /p/ は聴覺的にも兩音節に跨がるのである。然しこゝで私は Sweet が “close, open stress” と呼び (Primer, §159), Jespersen が “fester, loser Anschluss と稱した (Lehrbuch, p. 202) 現象を考慮に入れて、

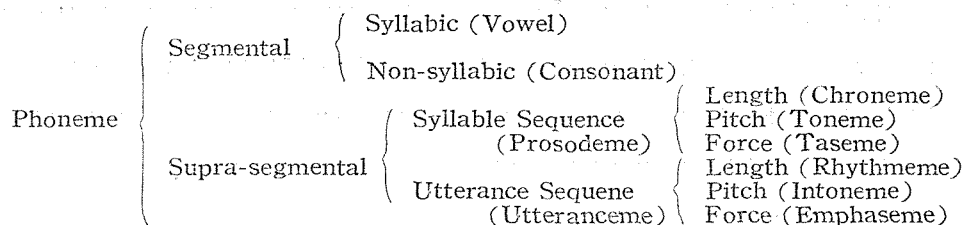
/p/ が両方に引つ張られていても、stress のかゝっている音節により強く結ばれているが故に、phonemic syllable としては /ká·p·i/ とすべきであると考える。この場合 stress とは便宜的に言つたまで、Strong Taseme /' / 及び Medial Taseme / / の兩者のみをさす (stress に就ては 8 に於て詳述する)。Strong と Medial とが続く場合は勿論 strong が優先する。即ち /CVC/ pattern により、ambisyllabic sound は stress のある音節に属するのである (原理3)。従つて butter, hitting は夫々 /bát·ár/, /hít·ig/ となる。そこで、弱勢の音節は可能な限りに於て基本形 /CVC/ を取るのではあるが、必ずしもこの pattern を充足しないことがあるということになる (原理4)。即ち ①/CVC/ の他に ②/CV/ ③/VC/ ④/V/ の四つの型が生ずるのである。①は一應別として、②から④は欠如した姿であるから、これは前述の「less なる combination」の場合である。それではこの欠如を補うものがなくてはならない。それは Weak Taseme / / が存在するからに他ならない。然しこの場合更に突込んでみると、同じく stress の欠如が存在するのに何故 4 つの型が生ずるかという疑問が起ると思う。服部氏が弱音節にも zero phoneme を適用して copy を /ká·p·OíO/ の如く解釋しているのはこの爲であつて、/CVC/ pattern に例外なく全部が参加出来るような操作である。勿論これは一つの方法である。然し私は何かしら、そこに作爲を感じるのである。第一に tasemes の種差という嚴然たる音聲環境の差異があることに觸れていない。第二に強音節と弱音節に具現する母音の segmental phoneme の差異 (例えば /æ/ は後者には現はれることがない) にも觸れていない (p. 71 参照)。更に第三に、disarm の如き場合 /dis·Oárm/ の /O/ は或る種の pause (少とも potentially に) が存在するが、hitting の /hit/ と /ig/ の間には實際問題として pause は存在し得ない。斯様に、元來この二つの音節は成立の條件が等しくはないのである。従つて無理に Procrustean bed につかせる必要はないと考えられるのである。①の場合は本然の姿を實現したもので、前に「possibility の限界」という表現を用いたが、そこまではいづれの syllable の構造も發展し得るという potentiality の存在を意味するわけであり、intensity の欠如によつてそれが阻まれなければならぬ理由はない。であるから、條件が許す限り弱音節と雖も /CVC/ を實現するのである。②から④の 3 型は déformé されているのであるが、無色の零機能の擔い手である Weak Taseme の存在がそれを可能にしていると観るべきである。そしてこの 3 型の相違は全く偶發的な音聲環境に支配されるものである。即ち、ambisyllabic consonant を挟んでは、之を強音節に取られる爲 V は前又は後或は前後に C がない場合が生ずる。(即ちこの場合 /C/ は所謂 <satellite> である。) 例えば copy /ká·p·i/ (/V/), cottage /ká·t·ij/ (/VC/), depart /di·párt/ (/CV/) となる。尙弱音節が続く場合は原理 2 により initial 優先で, territoriality /tè·i·tòr·i·æ·l·i·ti/, supernaturalism /sùw·par·

nēc・A・ra・liz・Am/ の如くなる。即ち /CV・CV/ 型となるわけであるけれども Medial
 Taseme が存在するから（これが/CVC/となることは既述）幾つもの /CV/ が続くことにはなら
 ない。更に、補足的に特に述べておくべきことがある。その一つは gemination となる所謂
long consonant は二つの phoneme に segmentation を行う（原理5） ことである。典型的
 な例は book case [búk:kèis] /búk・kèys/ である。bedtime [bét:àim] の如き場合は 勿論
 positional actualization である故 /béd・tàym/ となる（Swadesh: The Phonemic Inter-
 pretation of Long Consonants, Lang., 13.1, pp. 1—10）。今一つは、前掲 pattern 表 (II)
 a) に見られる /A+l, m, n/ の型及び /A+r/ の型は強勢ある母音に續かれぬ限り /VC/ の型
を崩さない（原理6） ということである。これは其等の型は phoneme の tamber から緊密な
 結合が生れているからであつて、phonetically にはむしろ一音として syllabic consonant 及
 r-colored vowel の範疇に入れている位である。従つて general /jén・Ar・Al/, national
 /néf・An・Al/ (syncompate して /néf・nAl/ となることもある), customer /kás・tam・Ar/,
 jeweler /júw・Al・Ar/ の如くなる。最後にも一つ述べておきたいことは、前に zero phoneme
 /O/ に Bloch 等の所謂 juncture の特徴の根據を求めて、disown を /dis・Oówn/ としたの
 であるが、一應これでわかつたようであつて、よく考えてみるとまだ釋然としないものがあるこ
 とである。例えば dissocial は /di・sów・fAl/ となる。即ち共に /disów-/ となつてい
 るのに /s/ が前者では第1音節につき、後者では第2音節についている。/O/があるのかない
 のか、どうして見分けるかということである。勿論 morphemics を援用すれば忽ち解決するが、
 それを除外して音聲面からのみ觀察すると、3つの規準があると思う。第一は own は utterance
 の中で獨立した單位として發音される事實があるに對し、後者では social がその單位である
 ことである。第二は従つて disown はその sequence に於て dis と own との間に possible
 pause があるに對し、dissocial は diss と ocial に分れることはない。第三に前者は後者に
 比べ、dis- にかなり強務がかゝっている。これは勿論 /' / ではないが、/ / ではなくて、/' / の
 category には入り得る allophonic stress である。後者は /dis-/ より /das-/ に表記しても
 差支えない位である。然りとすれば /dis・Oówn/ と /da・sów・fAl/ ということになる。この
 事は、mistake がこれまで述べた原理によれば /mi・stéyt/ となるべくしてならず、/mis・téyk/
 であるのは實は /mis・téyk/ であることを示すものである。この論據としては Kenyon-Knott
 の辭典でも A. C. D. でも /ma・stéyk/ という形をも記載している事實を擧げておきたい。

以上によつて、syllable の構造、及びそれに原由する syllabication の原理を不十分ながら述
 べたつもりである。言語の現象面は複雑なものであるが、essential な要素に分析しそれを sys-
 tematize する時は、案外な regularity が發見されるのであり、それが一般に捕捉し難いとされ

る Sprachgefühl を解く鍵となるのではないかと考えられるのである。本稿では専ら音聲面を取り扱っているのであるが、文法構造に就ても同様なことが言はれ得る筈である。兎もあれ、so much for the syllable として、次に以上の敘述の中で重要な因子となつていた stress を中心とする問題に取りかゝることにする。

8 Supra-segmental Phoneme 元來 phoneme とは、その本質を如何に解釋するか(第1部4参照)は別として、phone(單音)の問題である。然しこの「音素」なる概念を擴大して單音的な即ち segmental なものに對して exponential な、それに superimpose される要素にまで適用する解釋が主として米國の phonemicists によつて實行されている。そこでこれを supra-segmental phoneme と稱するのである。既に述べた如く、Bloch 等は之を juncture phoneme と prosodic phoneme としたわけであるが、其の他にも rhythm とか intonation とかの面からも supra-segmental phoneme が考えられないこともない。然し果してそこまで擴大していつてよいものかどうかという問題も當然出て来る。ことはしかく簡單ではないのである。然し差し當つては、supra-segmental phoneme なるものが、果して概念の不當周延であるかどうかということに就ては個々の case で検討することにして、一体如何なるものをそれに屬せしめるかを考えてみることにしよう。この場合私は「場」の規定によつて大体二つに分けることが出来ると思う。「場」(field)とは「ある仕事働く基面」であつて、これを限定しなければ現象は可變性を帶び對象を掴むことが出来ないからである。本稿ではそれを syllable を單位とする最大の sequence の場、換言すれば utterance の中で前後に pause が生じ得る最小の場——即ち大体に於て morphemics で謂う free-form (=word) の場に於けるものを考察することにしたい。そしてこの場に妥當するものを“prosodeme”, この場の外に出るものを“utteranceme”と呼ぶ。(後者は sound 以外の要素が介入し複雑な構成になり、且つ果して phoneme として定立出来るや否やは問題になるが、これ等に關しては改めて第3部で取り扱う。)私の scheme の大体を表示してみると原則的には次の如くなる。



segmental phoneme より成る直線的な syllable に superimpose される prosodeme は縦に syllable に交錯するわけであるが、この位置が「場」に於て意味を持つのであつて、兩者の關係は functional (相函的)であることに於て同一 plane に屬する。尙之等の phoneme を

定立するに當つて述べなくてはならないことは、存在することはそれ自体では意味はないのであつて、吾人の問題とするところは、言語という一つの system の全体相 (totality) に於いて機能を發揮する相對性 (基本的には contrast) なのである。scientific existence とは、物理的 (physical) であるか、虚構的 (fictional) であるかということを超えた、實相的 (factual) な相對性の体系であり得ることを吾人は考えておく必要がある。

(A) **Prosodeme** 凡そ音聲なるものを考察の對象とした場合、第一には その quality 即ち tamber が問題となるが、波形とか overtone-structure とか Formant とかに關しては phonemics では touch せず、これを syllable の structure から vowel と consonant の segmental phoneme として定立したのである。そしてその實現として syllable なる單位が考えられるのであるが、それに関しても structural pattern を中心にして解明を試みたのであつた。その際 juncture なるものを否定したので、こゝではそれに就てはもはや考察の必要はない。そこで残つたものは「長さ」と「高さ」と「強さ」の問題である。その内容と場に於ける撰擇に就ては、後で順次に述べるが、兎に角この三者は現實の音には必ず附隨する屬性である。之等を總稱して prosodeme (樂素) と名づける。即ち prosodic phoneme というわけであるが、phosody という語は $\pi\rho\omicron\sigma\omega\delta\acute{\iota}\alpha > \pi\rho\acute{o}\varsigma$ (to) + $\omega\delta\eta$ (song) から來たもので、結局は歌の韻律を意味したものであつた。因みに accent はこのギリシヤ語を文字通りラテン譯したもので $accentus < ad + cantus$ である。所が、「長さ」の方は所謂 prosody に於て傳統的に問題にされ、accent は主に「高さ」を問題にすることになつたのであつたが、「高さ」は次第に「強さ」に位置を取つて代はられるようになつた。そこで accent に musical accent 即ち pitch と dynamic accent 即ち stress の兩者を綜合させることが通常行はれている。斯様な次第であるから prosodeme ということでのこの三者を含めるのである。本來はこの三者は physically にみれば別個のもので、原則として「長さ」は單位時間の倍數、「高さ」は振動數、「強さ」は振幅に夫々關係するのであるが、實際の音聲ではこの三者が同時に融合した貌で現はれる。嚴密に言へば、吾人の知覺に於ては三者は數學的には必ずしも解決出來ない効果を持つて現はれくる。例えば高さと強さとの比率は音の大きさの知覺と複雑な關係を生ずることは實驗的に報告されている。吾人の立場はそれを linguistic facts としてのみ對象とするのである。従つて Jones の prominence 説や Pike の contour 説 (The Intonation of American English) が成立するのである。Michigan 大學の The English Language Institute で出している Fries 主幹の教科書 “Lessons in Pronunciation” で emphasized syllable は“長くて、強くて、高い”ということを述べているのは、その意味では (少くも米國英語では) 實用的でもある。たゞこの現象を科學的に研究する場合、何處に relevancy を求めるかゞ問題である。

こゝで、最初にのべた、斯くの如き prosodic elements を phoneme として定立することの可能性又は妥當性に就て考えてみよう。Haugen は “Phoneme or Prosodeme?” (Lang., 25.3, pp. 278—232) の中で次の如く言う: 「phoneme なる term は單に “distinctive” という意味で餘りに安易に濫用されているのではないか? phoneme は “successive” なものに限るべきであつて, Bloch が “the order of phonemes is either successive or simultaneous” と述べているのは訂正を要する. prosodemes の内容となつてゐるものは one-dimensional な time (linguistically 即ち phonemically には syllable) という基盤に於て解釋しなければならない。」同様な趣旨は、少し立場は異なるが、Jones も “Chronemes and Tonemes” (Acta Linguistica, 4.1, pp. 1—7) で述べている。即ち「例えば length なり pitch なるものは種々な條件によつて左右されるもので、勿論 grouping は可能であるとしても、極めて相對的な便法であつて、純粹な意味に於ける phoneme の概念と一致しない。」Martinet は “Phonology as Functional Phonetics” (p. 10) で phoneme を取扱うが phonemics なら tone を扱うのは、別に tonemics なるものをつくらねばならないと言う。其他色々の議論もあるわけであるが、根本の問題は segmental phoneme は sound の存在自体である quality を扱うのに對して、prosodic element はその屬性であるから同一に論ぜられないということにある。然し、屬性は本体でなく影であるかもしれないが、影も亦存在しているものである。然りとすれば、これを何等かの方法で整理しなくてはならない。構造言語學の立場は、言語は一つの system であるとし、それを structural unit に分析し、その combination の pattern を發見し、各 layer を綜合し regular な体系を整えるものである以上、屬性も構造的單位と認められ、又その定立が第1部で述べたような criteria によつて成立し得るならば、それは dimension を變じた世界に於て phoneme として取扱つてよいと考えられる。Haugen の如く同一 timing に於ける energy の量として stress を見てもよいが、その energy の吐け口を又何處かに求める必要があらう。Jones は現象に於ける相對性に難點を見たのであるが、むしろその現象面を規定する相對性を考えなければ、actualization 以上即ち phonetics の領域以外には出られぬのではなからうか? segmental phoneme の tamber も stress などによる relativity から free なわけではないと逆に考えることも出来る筈である。各言語音とも上記三種の屬性を持たぬものはないが、structural unit となり得るものが、その何れであるかは各言語によつて異り得るところに、arbitrariness もあり phoneme 的價値の裏付けもある。現存する實體は勿論 continuum であるけれども、要素分析を行うことに一つの epistemological significance が認められよう。Pike の intonation (これは第3部に於て問題とする) の取扱いは、色々な批判もあるが、この意味ではかなり大膽なことをやつていて興味深いものを感じる。この場合、contrastive 及び com-

plementary (mutually exclusive) distribution やその unpredictability の原理は特に重要なものであろう。次にこの三種の elements に就て個別的に考察してみることとする。尙言い忘れたが、之等は主として vowel に於て實現する要素である。子音に就ても考えられることもあるが、これは問題にする程のものではない。

(I) Length これは話音の長さ即ち timing の問題である。この場合二つのものが考えられる。一つは [ː] で表はされる單音の長さであり、今一つは sequence に於ける「ま」(間)の長さである。前者は所謂 “chroneme” であり、後者は “mora” として考えられる。前者に就て言えば、實驗音聲學によつて示されている物理的な長さ(例えば同一母音の有聲、無聲子音の前に於ける長さ)は勿論偶發的なもので對象にはならないから、regular なものに就て考察しなければならない。第1部で segmental phoneme の分析を行つた際、私は必ずしも quality 一點張で處理しなかつたのであるが、結局は quantity の問題は quality に還元することが可能であるとの結論を得たのであつた。即ちこの langue に於ては [ː] は構造學的に relevant ではないのである。例えば [iː] = /iy/, [uː] = /uw/, [ɔː] = /oə/ である。Jones が [æ] と [ɑ] を /a/ と /ɑ:/ で解釋し (The Phoneme, p. 168), 又 leaf: leave, seat: seed, loose: lose の子音の差を /:/ の有無で區別することを説いている (Ibid., p. 53) ことに就ては今更こゝで改めて論議する要はないと思はれる。尙 mora (例えば、日本語に於ける促音が一音節としての單位的價值を持つようなこと) は rhythm の問題であつて、今こゝで取扱つてゐる「場」に於ては prosodeme として問題にすることは出来ない (famous/fèymas/: infamous /ínfamas/ 等も第3部)。従つて、length に就ては本稿では考慮しなくてもよいということになる。

(II) Pitch これは話音の高さ即ち物理的には frequency の問題である。この場合も二つのものが考えられる。即ち “toneme” と “intoneme” である。前者は syllable 相互間に見られる高低であつて、Pike に従うならば (Tone Languages, pp. 4—11), これに “register-type” (level pitch のあるもので Mazateco [米印語] など) と “contour-type (gliding pitch のあるもので、中國語の多くの方言はこれに屬する) とある。Martinet はこれを Punctual 及び Melodic と呼んでいる (op. cit., p. 14). 日本語の場合は、大体前者の型であろうが、「言語高アクセント」とされ、従来から二段説、三段説などがあり、Bloch の分析 (Studies in Colloquial Japanese II, Lang., 22, pp. 203—204) では二段の様であるが、服部氏は、本質的には「アクセント核」の問題としている (音聲學, p. 193). この toneme なるものが、この言語にあるかを反省してみれば、該當するものがないことは明白であらう。尤もそのように簡単には割り切れぬかもしれない。例えば Jones の所謂 prominence では實驗の結果により、pitch が

實は重要な要素であると言う（特に *The Phoneme*, pp. 146—151）。又 Pike も同じく stress と pitch とでは pitch が斷然重要であることを述べている（*The Intonation of A. E.*, p. 7）。然しこれは現象面から見た場合であつて（然もその全部ではない）、その基底となるものから出發していない。例えば高さで強さでは吾人の知覺の反應度が随分異つてゐることは夙に實驗によつて明らかにされているのであり、又この二つ或は長さも參加して渾然として一つの効果を發揮することも事實である。前に述べた「emphasized syllable が長く、強く、高い」という原則はこの意味で首肯されることがある。然しこの場合よく注意するならば pitch といつても toneme を意味していないのであつて、實は intonation をその中に入れて論じているのである。警戒すべきことはこゝに扱う「場」と utterance 全体が一致している場合（例えば one word sentence の様な場合）で、これは峻別しなければならない。こゝで限定している「場」に於て rhythm, emphasis, intonation が存在しないのではない。別の plane に屬する要素が現象面でダブつて現はれていると解釋するのである。これは前項の mora の場合も同様である。intonation の要素分析による intoneme は本稿に於ける「場」の規定により prosodeme としないわけであるから當然こゝでは取扱はない。従つて、pitch も亦 relevancy がないということになる。

(III) Force 最後に残つたのは強さ、即ち物理的には intensity の問題である。音の「大きさ」(loudness) は知覺上の言葉である。(loudness と intensity は全く同一ではないが普通の場合大体一致する。) この場合も二つのものが考えられるが、こゝで問題になるのは stress の phoneme 即ち *taseme* < *τάσις* (tension) であつて、Coleman や Armstrong-Ward が説いた emphasis (contrast 及び intensity) は utterance の場の内容である。stress は英語に於ては中國語の tone、日本語の accent と同様な構造上の價值を持つものと考えられる。

(II) で述べた pitch によつて現象的に代表されるが如き事實は無視出来ないし又 Pike のように、逆に pitch から stress を規定する（*The Intonation of A. E.*）立場も生れるのであるが、どちらが本質的に規定性を持つかに就ては種々の根據によつて stress がその主人であるとするのが妥當であると思う。例えば Pike の Intonation 説を R. S. Wells (Review: Pike's Intonation, *Lang.*, 23.3, pp. 255—273) や Eli Fischer-Jørgensen (*K. L. Pike's Analysis of American Intonation*, *Lingua*, 2.1, pp. 3—13) は叩いて、要するに intonation contour は stress-group によると述べている。音の強さと音の高さとの吾人の側に於ける認識能力はその程度に於て強さに對する方が著しく低いことは紛れもない事實であることを考えるならば、pitch が intensity の表示として有効であることは充分首肯されるのであるし、Jones の promi-

nence 説の成立根據もあるわけであるが、それは stress が存在することから生ずる現象であつて、因と果とは reverse 出來ぬ筈である。即ち強さを eliminate して高さを残すことは出來ないのである。更に tone がないのであるから (tone のある言語でも勿論無關係ではないが) pitch は situation によつてその位置が動くのである (例えば “fountain!” と “fountain?”) ことを考えるとこの關係は自づと明らかであろう。元來 accentual system としては、一つの langue が二つ以上の要素の体系を持つことがないことは Trager (The Theory of Accentual System, p. 144) あたりも指摘している通りである。Martinet によれば勿論英語は stress による accentual language であつて、non-accentual language に對している (op. cit., p.12). 要するに、本稿では prosodeme としては、taseme なるものを、そしてそれのみを、relevant と認めざるを得ないということになる。そこで、これに就て更に調べてみることにしたい。

a) Taseme の機能 taseme の存在を立證するには種々の方法があるが、その distribution によつて生ずる働きを具体的に例示することが最も効果的であろう。先づ (1) segmental phoneme が全く同じものを舉げてみると、Jones が純粹な意味では殆ど唯一の例ではないかというものに below /bilów/ : bellow /bílow / がある。同様な意味で August /óægást/ : august /òægást/ を舉げてよいであろう。又 morphemically に relate しているものでは import /ímpòrt (n.) : impòrt (v.) / の如き例のあることは周知の通りである。之等は contrast をなす distribution であり、mutually exclusive (従つて complementary) な distribution であり、Prague 派の所謂「意味的示差」機能を示すものであると考えられる。ところで、こゝで考えねばならぬ重大なことがあると思うのである。即ち上に示した如き、兎にも角にも segmental phoneme が全く同じで contrast をなす例は、實は限られた數しか存在しないのであつて (この事は多くの學者が既に指摘しているし、又 Pike は contrast で taseme の存在を知ることは出來ないから intonation によるべきだと説くのであるが) 普通に言はれている stress による語義の區別は次の (2) の category に屬するものが多いのであるし、又 (2) の意味に於ても contrast をなすものがない場合も少くないのである。例えば grammer /grémár/ に對しては比較の對象になるものは存在しない (grammarian は (3) に屬する)。然りとすれば、嚴密な意味での contrast は少數の例外を除いては英語に於てはないのではないかということになる。然し私はそれにも不拘 contrast が taseme の最も重要な機能であると思うのである。こゝで思い出すのは wrong place に stress を置いた發音を聞くと、假に相手の言う意味が察せられるとしても、native speaker にとつては extremely confusing であると Pike が述べている事實である。私はこのことから「あるべき場所にない」ことは「あるべき場所にある」

ことと対照すると考える。即ち pocket /pókit/ は、それ以外の形では存在しないことに於て zero-form に contrast をなすわけである。従つて比較の対象は常に存在しているのであり、それが具体的であるか否かであるにすぎない。次に (2) として考えられるのは, export/ékspòrt.(n): ikspórt (v.) /, invalid/invélid (not valid) : ínválid (sick) /, conjure/kánjar (juggle): kanjúr (implore) / alternate /óəltarnèyt (v.) : /óəltanit (adj.) / content /kántént (satisfaction) : kántènt (what is contained) / 等々である。これは實は segmental phoneme そのものが異なるのであつて、所謂 contrast ではない。故に alternate の如き場合は /i/ と /ey/ との差で副強勢の問題ではないとする一派がある。然し私は segmental phoneme と taseme との間には、前述せる如く functional relation があると思うのである。“content” の /á/ と /A/ の関係などは勿論 allophone ではなく（然りとすれば overlapping となる）又 alternation でもない（同一語義ではない故に）のであつて、各獨立の segmental phoneme が具現しているに過ぎないのである。たゞこゝに見られる事實は taseme の種類（後述）によつて、例えば /æ/ などが現はれる場合と現はれない場合とがあるということを示すことに注意を惹きたいのである。即ち vowel の phoneme の種類は taseme によつて、又 vice versa に、規定されることがあるということである。（尚 consonant も Verner's Law 其他の適用を受けて exert: exercise の如き conditioning を受けることもある。）序でにこゝで vowel と taseme の functional relation を纏めて示すと、/ / 及び / / は七つのすべての母音を取り得るが、/ / を取ることの出来るのは單獨の場合 high の /i, u/ 及び central mid の /A/（即ち調音 energy にを多く要さぬ上部逆三角形を構成する母音）のみで、他の mid /e, o/ 及び low /æ, a/ は取らないのであり、又 glide の子音との結合 pattern に於ては / / を取り得るのは /A/ のみである。このことは逆に vowel の segmental phoneme から taseme の種類と所在を推定することの可能性を示すものである。（3）として述べなければならぬことは、主強勢に関して、Jespersen が “Einheitsdruck” (Lehrbuch, p. 216 ff.) と呼んだような事實の指摘である。即ち admire /Admáyar/, admirable /ædmaraðal/, admiration /ædmareýfan/ というように、syllable の sequence を自己統一体に纏め獨立化し個別化する作用である。従つて、black bird は /blæk bárd/, blackbird は /blæk bård/ である。（尤も black [not white] bird の場合は /blæk bård/ となる可能性はあるが [Pike: Intonation, p. 82], 私は blæk bárd/ とすべきであると考え。即ち utterance の問題である。）所謂 compound-word と phrase の相違は從來種々の人々が色々と説明せんと試みているが、他の場合と同じく borderline case があるわけで決定的なことが言えないのであるけれども、結局の所本稿の「場」の音聲面からは、



この unity stress に依存するより他はないと思う。換言すれば、こゝに規準としている「場」は最強の taseme による syllable の grouping によつてゐるわけで、前後に pause が來得る最小の「場」というのもこの謂である。（fifteen の如き數詞は even stress を有すると言はれるが、實際は fore-stress 又は end-stress の pattern の何れかになる。）又所謂 noun adjunct（例えば English teacher）の場合は /'—' / であつて compoud, /'—' / であれば然らざる phrase と解釋出来るのではなからうか？（尙 Harris の如く、get-up は /'—' / であるが pitch により高低となり compound となるというような説 [Methods in S. L., p. 331] は改めて utterance の場で考えたい。）要するに syllable sequence の grouping の機能を最強の taseme に見ることを指摘しておく次第である。（4）尙 7 の syllable の所で述べた /CVC/ pattern の定型者として /' / 及び /' / が考えられることも序でに述べておきたい。（5）申すまでもないが、今まで述べたような機能を持たない distribution に現はれる taseme も存在するが、これは zero 機能の擔い手であると考えられる。

b) Taseme の性格 所謂 accentual system としては taseme も static (register) type 乃至 kinetic (contour) type の二つが考えられるわけであるが、(Trager: Accentual System, pp. 133—134) 英語に於ては勿論前者に屬するものと考えられる。この點に關しては問題はないであらう。次に “fixed” か “free” かということがある (Grey: Foundations, p. 64). Gr. の *πόδα: ποδός* の様な場合は shift が行はれるもので “free” であるが、英語の *rhétoric: rhétorical* などは一見紛はしいが、これは別のものであつて、“fixed” の type に屬するものである。更に Martinet は Czech の如く常に最初の音節に stress が來たり Turkish の如く常に最後の音節に stress が來るものを “bound” とし然らざるものを “free” というが (op. cit., p. 12), この意味では英語は純 phonemically には必ずしも機械的に stress の placement が決定出来ないわけであるから “free” である。この兩者は別の立場からの分類であつて、本稿で取扱う taseme は free に各語に fix される static なものであると言ふことが出来る。

c) Taseme の種類 「強さ」の程度は物理的には無限であり得るがその測定は音響學的にも困難な問題があり、吾人が必要とするのは知覺上の區別である。Wundt がリズムに於ける音の強まりの程度に三つの段階があり、これ以上は意識的に分化されないとしたことは有名な説であるが、大体首肯される限界であらう。所で、この問題を取扱うのに ①從來の prosody でやつていたような strong (´) と weak (×) の二種を對照するもの ② strong (primary (['], half-strong (secondary) [ˌ]) の二つに strong を分けて三段階とするもの ③ Jespersen が

“Notes on Metre” で示したように strong, half-strong, half-weak, weak の四本建とするもの ④ 多数の段階を認めるもの (例えば impenetrability を 2375164 とするが如き) の大体四つのやり方が今まで行はれて来たと思う。そこで、次に上の各々に就て具体的に調べ最後に検討を加えて結論を出したいと思う。

先づ④から始めると、これは特殊な目的の爲に行う場合は別として、一般に妥當するとは考え難い。構造學的にどれだけの根據があるかも疑はしい。多くの場合これは utterance sequence の問題であつて (例えば prosody に於てはかなり多くの stress の段階を認めることが望ましい場合がある)、これは本稿の「場」の埒外である。二つの「場」 (syllable sequence と utterance sequence) は峻別しないと 兎角混同される恐れがあるから注意を要する。尚こゝで述べておきたいのは S. S. Newman の 8 種類を認める説である (On the Stress System of English, Word, 2. 3, pp. 171—187). 彼の scheme を紹介すると A. Expressive Accent 1. Contrastive (yellow = not white) 2. Quantitative (large = very large) B. Stress Accent 1. Heavy a. Nuclear Heavy (intonation の中心になるもの、例えば annual) b. Subordinate Heavy (intonation の中で中心にならぬもの、例えば annual meeting) 2. Middle a. Full Middle (open juncture を持つもの、例えば subdominant) b. Light Middle (close juncture のあるもの、例えば, analogical) 3. Weak a. Sonorous Weak (reduced にならぬもの、例えば ancestral) b. Peper Weak (reduced になるもの、例えば analogy) ということになる。A. は明らかに emphasis の問題であるから、こゝでは當然除外されるので、實は 6 種類となるのであるが、綿密な分析であつて妥當と考えられる節も多い。然しながら relevancy がその總てにあるとは認め難いし、結局は三段説に要約出来ると考えられる。次は③の 4 段説であるが、Jespersen のものは prosody のものであるから除くとして、有力な phonemists の代表者は Bloch である。彼によれば (Outline of Linguistic Analysis, p. 48), 必要にして且つ充分な stress は loud, reduced loud, medial, weak /á, â, à, a/ の 4 種ある。例示すれば movie-ambitôrium, elevàtor-ôperàtor, black-bîrd (cf. black bîrd), àltogéther (cf. àll togéther) の如くなる。この場合問題となるのは /[^]/ と /[˘]/ の関係であつて、そんなに簡単に割り切れるものかどうか疑問がある。②の 3 段説は従来より慣行のものである。Bloomfield は stress として /^ˆ, /^ˈ, /^ˌ, /[˘]/ を示している (Language, pp. 91—92) が、/^ˆ/ は emphasis であり、/[˘]/ は syllabic stress であるから、こゝでは除外すると、/^ˈ/ と /^ˌ/ とで結局 primary と secondary を認めて 3 段となる。Trager は loud, quiet, soft (unstressed という negative term を用いない) の三者を認め、これ以上の區別を立てるのは、別の要素即

ち quantity とか intonation を superpose せるものであると断定する (Accentual System, pp. 137, 144). 前に述べた Newman の説も結局はこの3段説を敷衍したものである。この3段説は極めて常識的であるが、それだけに cover し得ない現象があるのではないかという懸念がなくもない。最後の①は2段説であるが、最も素朴な対照観であると同時に本質直観的契機を孕んでいるものである。Martinet は secondary accent は chief accent の位置に依存するものであり、且つ differentiating function がないと述べている (op. cit., p. 13) が假にこれが事実とするならば、secondary stress を taseme として定立する structural meaning はないわけである。これに就ては後で觸れるが、今一人2段説を大上段に構えている闘將がある。これこそ The Intonation of American English の著者 Pike であつて、彼の所説を聞くならば先づ根本的には stress は intonation contour (抑揚曲線) を考えることによつて解明せられるということである。そして、stress の phenome は only one であるとする (Phonemics, p. 77). 尤もそのことは、その他に phoneme of Absence of Stress を認めている (Intonation, 82) というこゝで、(emphatic stress は一應除外されるから) 結局2段説となるのであるが、この根據としては primary contour の beginning point によつてのみ、stress の存在が立證されるということを擧げている。従つて secondary stress は無視されてしまう。彼によれば Bloch の /[^]/ は /' / か / / かの何れかになることになる。即ち、副強勢は、抑揚曲線の頂點には普通ならないこと (Ibid., p. 11, 77—38), separate の如き場合 v. と adj. の差は -ate が /-it/ と /eyt/ の segmental phoneme の相違にすぎないこと (Ibid., p. 189), 及び主強勢以上の degree に於て contrast を成立せしめる例がないこと (Ibid., p. 83) 等により、存在しないとされるのである。Pike は更に附け加えて、"Some words may have two innate stresses" (Ibid., p. 77) として、例えば hesitation が  という二つの山のある contour を實現する場合を考え、前の頂點を optional stress, 後の頂點を obligatory stress の實現とし、前者は suppress されて  となる場合もあるが、intonation により re-stress される potentiality を有する故に unstressed ではないという (Ibid., p. 87). 以上が Pike の所説の大要であるが、興味深い諸點があるにしても、それだけ難點もあるように思う。

最後に以上の諸説を検討して、私の結論を述べることにしたい。先づ強くて(大きい) stress が存在することは a) で述べた機能からも否み得ない事實であるから、これを認めて strong の taseme /' / とする (Newman の Subordinate Heavy は intonation に關係するから除外すべきであろう)。それから、そのような特徴や機能を持たないものがあることを認めるのに何人も異存がないであろう。この zero 機能の擔い手を weak の taseme / / としておく。そうす

ると、この二つの中間に secondary なものがあるかないか、あるとすれば幾通り認められるか、が問題である。Martinet は secondary のものは ① rhythmical であり、② differentiating function なし、としたが、①に於ては、primary に對して前にも後にも、又一つおいても二つおいても三つおいても secondary は來得るのであつて（又全然來ない場合もある）、predictability は morphemics を援用するならば或る程度まで可能であるかもしれぬが、phonemics の立場からは嚴密に言えば arbitrary であるし、②に於ては、例えば Jones (the Phoneme, p. 148) が、certification /sɑrtifikéyʃən (granting a certificate) : sɑrtifikéyʃən (act of certifying)/ を挙げているにしても彼自身も doubtful と述べている如く、そして Pike も述べている如く普通の意味では contrast をなさないから、首肯出來ぬこともないが、a) の (2) で述べた segmental phoneme と taseme の functional relation により separate の -ate は /-it/ と /-eyt/ でなく /-it/ と /-èyt/ であると考えられるし、又同じく a) の (1) に於てのべた zero-form に對する contrast があるわけであるから、結局 secondary を否定することは出來ない。又素直に觀察した場合例えば military に於て二つの強まりがあることは認められるのである。そのことがあればこそ Pike は optional stress を認めたのではなからうか？所が、彼は optional は secondary でなく primary stress の一種だとする。その根據は、前述の他に、phonetically には認められる中間強度は時には抑揚曲線の頂點にもなるし、全然 suppressed になる時もあるとあつて unstable であつて、中間のものとして設定することは出來ない。何故なら any two phonemic entities が homophone になることはあり得ないからである (Ibid., p. 84) し、suppressed の場合 unstressed と區別するのは re-stress される potentiality を有するからだ (Ibid., p. 87) というのであるが、これは論理が一貫していない。上の p. 84 の記述を彼によつて正しいとするならば、即ち optional が別物ならば stressed と homophone にならないから stressed そのものと同じであるとするならば、同じ optional が suppressed の場合も unstressed と homophone にならない筈である。然し suppressed の場合は彼の規準とする intonation contour から unstressed と全く同じとなるのであるから、「ある」ものが「ない」ものと一緒になるのはおかしい。（この場合に potentiality を持ち出すのは根據が弱いと思う。）然らば optional は又同時に unstressed であるとしなければ理窟に合はない。然しそうすると一つの中間強度が stressed と unstressed の二つの tasemes の allophone になるわけで、phoneme 定立の原則の一つである non-overlapping と矛盾する。假に一步譲つて、optional が obligatory の allophone 的存在としてみると、こゝに substitution test に堪え得るか否かの問題が生ずるが、これは勿論成立しない。更には一つの sequence の場に二つの Strong が

あつては統一体が成立しないことも考えねばならない。従つて、Strong と Weak の中間に第三の *taseme* がどうしても存在せざるを得なくなる。まして *intonation* をこの場合一應 *plane* の異なるものとして除外する立場にあつては尙更そうである。それでは次にこの中間物は一つであるか二つ以上であるか？ Bloch の /^ˆ/ と /^ˈ/ は微妙であつて、Newman の *scheme* と對比すると、Middle (Full と Light の區別は *juncture* の種類によつてゐるが之は既に 7 で述べたから差別する必要を認めない) が /^ˆ/ に當り、Sonorous Weak が /^ˈ/ に當ると考えられるが、事實 *phonetically* にはこの區別がないこともないのであつて、現象の説明には便利なこともある。(殊に B. E. に比べ A. E. では *secondary* が際立つてゐるから、兩者を認めることによつて、*stress* の配分に無理がなくなり均分化が行はれる利點がある。) 然し存在すること自体が *relevant* でないことは繰述せる通りであつて、構造的に *significant* な *feature* であることが問題である。Strong 及び Weak にも段階があるが、機能の擔い更として各々一種である如く、/^ˆ/ と /^ˈ/ の間には、その *function* に於て區別出来るものはないと考えるのは間違であらうか？ 私はこの兩者は *substitution test* に堪える、一つの *phenome* に對し互に *allophone* の關係にあると立つものと思うのである。即ち、*bláckbird* (*bláck bírd*), *àltogether* (*áll togethér*) *subdóminant*, *àncéstral* として差支がないと考えるのであるが如何なものであらう？ /^ˈ/ が稍強く發音される場合もあるし、稍弱く發音される場合もあるが、それは中間強度 *Medial* の *taseme* /^ˆ/ の *allophone* に過ぎないのであつて、それは Strong /^ˈ/ と Weak /^ˆ/ と區別出来るものである。かくすることによつて、*segmental phoneme* の實現、*syllable* の形成等に一貫した連絡が成立し、又第 3 部に扱う *utterance sequence* に於ける *intonation*, *rhythm*, *emphasis* の分析の根據が存在することになる。結論は、*after all is said and done* に於て、至極平凡な、そして從來から最も普通に行はれてゐる(たゞ中間強勢の幅は擴げたが) 3 段説に落着いたのであるが、その爲に以上の論述が全く無意義となるものではない筈である。

以上、本稿に於ては *syllable* 及びその *sequence* の纏まりに於ける現象を *phonemically* に觀察したのであつた。これを以て前編とする。紙面を節約する爲記述が簡に過ぎたり、例示が乏しかつたりして意を盡し得ない點もあるわけであるが、事情を諒とされたい。残つた問題は *utterance* 全体を *cover* する現象を取扱う第 3 部の研究であるが、これは後編として機會を得て發表したいと考える。尙第 1 部第 2 部を通じて數多く發見されるであらう過誤と獨斷は忌憚なき叱聲を得て今後とも訂正して行きたい念願である。

(前編終り)